

占領に加担するな

自衛隊はイラクから撤退を

「殺されるかもしれないし、殺すかもしれない」(小泉首相)といいつつ、政府は自衛隊をイラクに派兵しました。占領軍の一員となる自衛隊の派兵は、無法な侵略戦争と占領の支援・加担のためです。イラク国民の立場からみても、国際的な道理からみても、憲法の立場からみても、なんの大義もありません。

侵略戦争・占領が元凶 国連中心の復興支援こそ必要です

イラク戦争は、もともと国連も認めない無法な侵略戦争でした。イラク市民1万人が犠牲になっています。さらに続く野蛮な軍事占領で、銃口を突きつけられ、主権が奪われているのです。いま必要なのは、占領の終結と主権の回復、国連主導の枠組みでの支援です。一方で、銃口を向けながら人道支援など成り立ちません。だから国連のアナン事務総長も「占領と復興支援は両立しない」とのべています。

イラクで人道支援をしてきたNGOの声を聞いてください

「イラクは危険だから自衛隊が行くしかない」と思うのは、大きな錯覚です。自衛隊は武装米兵の輸送もします。イラクで活動してきたNGOは、自衛隊が行っても役に立たず、かえって占領軍と区別しておこなわれてきた人道支援がやりづらくなり、妨害になると警告しています。イラク国民は、占領軍の支援を望んでいません。占領軍の撤退と主権回復、国連主導の復興こそ人道支援の実効ある道です。



イラク国民が望んでいるのは、武装した自衛隊ではありません(イラクでの自衛隊部隊)

大量破壊兵器はなかった!! 戦争支持の口実も消滅!!!

占領下のイラクで大量破壊兵器の調査をしてきたアメリカ調査団のケイ団長は1月、「湾岸戦争後、イラクには大量破壊兵器はもともと存在しなかった」と証言しました。アメリカのイラク攻撃の口実が、アメリカの当事者の言明で消滅したのです。こんなデタラメな口実で戦争をはじめ、1万人ものイラク市民が殺されたのです。いまだに「戦争支持は正しかった」という小泉首相の胸は痛まないのでしょうか。

--	--